

## 16 キャベツ

### 地域慣行基準

#### 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
南・北佐久	25	
上記以外の地域	20	

※①前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

②5～6月出荷の場合は、上記窒素成分量を2割上乘せするものとする。

#### (1) 特徴及び吸収特性

キャベツは**吸肥力が強い**割に過剰生育や濃度障害も起こしにくく肥培管理は比較的楽である。反面、多肥栽培となりやすい。

養分吸収量は通常の生育をした場合、**窒素20～30kg、リン酸5～7kg、カリ25～35kg程度**である。土壌中に窒素成分がたくさんあると、キャベツは窒素をよく吸収し葉を繁らせるが、吸収する割には収量に結びつかず、結球が遅れたり病害が発生しやすい。

レタスやハクサイが球肥大後期まで養分吸収が盛んなのに対しキャベツは**結球始期頃に最も養分を吸収**し、結球期後半の養分吸収は緩やかになる。結球期には外葉より結球部へ養分が移行する。キャベツは**外葉をしっかり張らせる**と球の肥大もよいが、外葉が張る時期に養分が不足すると収量も低下する。したがって、**初期生育を促進させるような施肥が重要**である。窒素が欠乏すると生育が劣り葉色が薄くなり結球しない。

施肥量は10a当たり窒素20～25kg程度、リン酸10～20kg、カリ15～20kgが目安である。このうち窒素とカリの60～70%とリン酸の全量を基肥とし、追肥は残りの量を2回に分施する。追肥の割合は生育期間の長い作型ほど増やす。**追肥の時期**は窒素は外葉が形成される**初期重点**に行う。但しこの時期に肥効が強すぎると外葉が伸びすぎるので加減が必要である。窒素の吸収特性から**結球が始まってからの追肥は効果が低く**、追肥が遅れると収穫時期が遅延したり裂球を多発させる。キャベツの施肥では窒素の過剰害が出にくいいため多肥となる傾向がある。有機物から供給される肥料養分を考慮することを含め減肥栽培が望まれる。キャベツは冷涼な気候を好み生育適温は15～20℃である。春まき作型では高温期に球が肥大し生育期間が短いので、施肥量が少なめとなる傾向がある。夏まき作型では生育期間が長く収量も多いので施肥量が多めとなる傾向がある。

表 目標収量と養分吸収量

目標収量 (kg/10a)	養分吸収量(kg/10a)				
	窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土
6,000	20～30	5～7	25～35	20～30	5～8